にて、密に御所を出させ給ひて、鞍馬の奥へ御幸なる。

法住寺合戰の章。

按察使大納言資賢卿の孫、右少將正賢も鎧立烏帽子にて、軍陣へ出でられけるが、樋口次郎兼光の手に掛りて、生捕にせられけれ。

行長、資時父子三人の悲慘に關する記載此の如し。且つ平家物語は、天承元年より承久三年に至り、九十年間の物語にして、後白河天皇の御代に屬する皇室ほど、衰れ至極の時世あらず、平家音樂は此の慘劇の時事を演ずるものなり、頼山陽は、其音悲壯感憤聽者悽愴ならざる莫しと云ふ所以なり。資時、法皇の寵臣として、親しく朝廷に奉仕し、一旦身退くに於て、天日地に墜ちたる事柄と、自家父子三人の、身の上に關する浮沈の事柄と記載せし文章に對し、之れに音譜を被らしめて、音樂と爲し、之を職業にせしとすれば、如何に源平時代の公卿は、無氣力無節操と雖ども、臣子の本分として、忍ぶ能はず、又た爲し得べからざる事態にあらずや。

傳說の平家物語を作り、平家音樂を作るとの行長は、もと後鳥羽天皇の伶人と云ふ。平家物語を作爲するも、世を遁れ身を隱し、其踪跡を韜晦し、音樂は盲人生佛の業に委して職業と爲さしめ、世々盲人に傳へて繼續せしむ。其心事の高潔なる此の如し、是れ即ち平家音樂の高尚なる所以なり。源平時代にも此の如き人あり、資時も、君父を辱かしむる人に非ざるべく、資時平曲の元祖と云ふの說は、其妄誕たるを知るべきなり。

又傳說に、生佛は、後堀川天皇の寛喜三年に檢校と爲るとあり、檢校の職名は、淸和天皇の時、人康親王薨とならせたるとき、盲人に賜りし職名を復興せられしものにて、四條天皇の時、更に薨盲保護の制度を定められ、平家音樂は、天下薨盲の藝術と爲し、法華頼寫の式に加へ、王公貴人の祭典に供せらる、然るに正眼の正佛元祖と爲るとすれば、薨盲の藝術と爲せし理由なかるべからず、又生佛は、如一の誤りにあらずやと云ふ。琵琶は、平曲に必要なしと云ふが如きは、平曲を知らざる山田君に對し、答辯するの限にあらざるなり。然れども山田君、舊來の傳說を破毀するに足るべき、實證を得て、正佛即ち資時を、平曲の元祖と爲し、又平曲を學習して、琵琶の不必要を感じ、正史を作爲すれば、資時の不忠不義は惡むべきも、漸之進の著作せし、平家音樂史の反古に屬するを喜び、又七百年來、平家音樂の記錄を破毀する破天荒の發見にして、文部省は、國語調査局を置き、山田君を、平家物語研究の擔任と爲せしを頌ひ、明治昭代文學上の一大進步と稱すべきなり。

漸之進、近日發行すべき、平家音樂史に、平家物語の著者及年代、平家音樂の起原及び沿革を詳記せしも、尙平家物語の文章に就き、其認むる所を記載し、漸次山田君に答へんと欲するなり。

跋文

藤原行長、王權の武門に移るを憤慨し、後鳥羽天皇の樂人を遁れ、慈鎭和尙の佛界に投じ、皇室を中心と爲し、佛法と王法とを咀嚼呑吐し、一の新佛教を作爲し、其經文は、佛樂と雅樂とを咀嚼呑吐し、一の諷誦を作爲せり。我國、佛法を輸入せしより、幾多の名僧を出生し、多々の佛宗を起し、種々の佛教を立つるも、未だ佛教を日本化して、新佛教を作爲せし

者あらず、又我國、語音の强弱を基礎と爲し、新樂譜を作り、其經文を諷誦する者あらざるなり。而して其佛教は、王者を犯す者を斬るの教にして、其諷誦は其斬る者を呼起すの聲なり。歷世の王公貴人武士文人、此聲に感激せしは、史乘に詳かなるも、其一二を左に示す。

賴山陽、門人牧善助の諷誦を聽く詩に云ふ。

茫々鯨海葬纓簪、　到耳琵琶意淺深、
赤間紫溟曾歷處、　燈前呼起十年心、

山陽は、深く行長の文學を信じ、無限の所感を以て是を詠ずるを知るべし。

津輕藩、高倉家老、我先人楠美太素の諷誦を聽く詩に云ふ。

一曲琵琶妙入神、　源平榮辱甚酸辛、
雲臺漸滅勳勞跡、　竹帛既汚跋扈身、
壇浦紅波隨撥亂、　鵯峰白旆與音新、

此間最是傷心事、　留將幼皇付海鱗、

此詩は、平家物語の小史論なり。高倉家老は、國事を以て罪を藩に受く、此詩を以て其人格を知るべし。新佛教の諷誦經文は、國家は、盲僧の業と爲し、法華頓寫の式に加へ、王公貴人の祭典に供し、國教と爲して制度を設定し、保護維持せり。然るに明治政府に至り、七百年の制度を廢し、國教をして地を拂はしむ。其影響する所、今代の華族は、古代の公卿大名に倍蓰し、而して一人の之れを愛好する者無く、新進の文人は、雲霞の如く繁殖し、而して平家物語の心と體とを知る者無し。其政策、國家の風教文學に及す影響此の如く、其裏面の背景を見れば、國家の道德を毀損し、國民の思想を破壞し、我國三千年の人心を紊亂するの趣きあり。古代に生ぜざる、危險思想の賊子を生ぜしは、其證據立てする者なり。行長をして今代に在らしむれば、國學と歐學とを咀

嚼呑吐し、國體を中心と爲し昭代の新文學を作爲し、國家墮落の風紀を一新し。國樂と歐樂とを咀嚼呑吐し、國華を中心と爲し、昭代の新音樂を作爲し、國家腐敗の風俗を一洗し、世態の匡正に努め、文化の發展に努むるは、其神才に徴して知るを得べし。豈唯是のみならんや、今や列强の跋扈に遇し日本刀を世界に揮ひ、又揮はしむるの教育に當るは、愛國的蓋世の才氣と、尊王の精神に徴して知るを得べし。

而して世に行長無し、我に天佑有り、大隈伯をして此教育に當らしむ。嗚呼大隈伯は、此教育に於て明治の行長乎。

平家物語論 終

明治三十九年出京せしは、吾肇造し特許を得、第五回内國勸業博覽會に出品し、賞與を賜る、自働華莚織機を携帶し殖産興業に資するにあり、然るに邦樂は、

天恩の洪大に依て、東京音樂學校に保存せられ、乃ち自家の事業を放擲し、五年の歲月を費して平家音樂史を編叙し、國家に貢獻せんと欲するの微衷に出づ、吾は頽齡にして僅に殘年を送る者、又華莚事業を經營するの餘力なく、天下の同業者、藺莚界の新生面を開き、華莚貿易の盛大を期する者、企望に因て無償の贈讓を爲さんと欲し、音樂史の附錄として、其活歷史の事實顚末を詳記し、發行せしに、讀者は其文章の一斑を見、廣告的に誇大の流布を爲し、奇利を博するの所爲と見做し其非難攻擊を受る尠少に非す。畢竟するに、世の誤解を招き、人の誣罔を買ふは、吾の精神到らさる所にして恨む所なきも、東奥古武士の性行として、其誹謗を受くるは堪ふる所に非ざるなり。

今般自働華莚織機二個を農商務省に寄贈し、又金湯藥は祖先の遺法にして、吾は新に官許を得、藥力の及ばざる痼疾を痊癒するの効力あり、一般の貧民に施用せんと欲し、濟生會に寄贈せり。

平家音樂史と、附錄の經世小策にて金七圓と爲せしに、今回平家物語史論、平家音樂史の二冊にて金七圓と爲し、經世小策は無代進呈と爲せり、讀者幸に諒せよ。

明治四十四年十月一日印刷
明治四十四年十月廿五日發行

平家物語史論　金壹圓五十錢
平家音樂史　金六圓五十錢
經世小策無代進呈

著作者　東京市神田區西小川町二丁目五番地　館山漸之進

發行者　北海道旭川町陸軍發電所官舍　山天民

印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　神谷岩次郎

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社

版權所有

과 2D 46

913.45
Ta936h
Ⓜ

089045−000−0

913.45−Ta936h

平家物語史論

館山　漸之進／著

M44

DBL−0281